

第8回「きらりと光る北の建築」賞入選作品発表

第8回「きらりと光る北の建築」賞の作品展示会が、さる11月13日～15日、札幌地下街オーロラタウン・オーロラスクエアにおいて開催されました。

今年は特にテーマを設けず、街に建つまさに「きらりと光る」建築を訪ね歩き、素敵な作品を多くの市民の皆様にご紹介させていただきました。

勝手に作品を探し出して市民の皆様にご紹介し、**勝手に**賞を授与するという本企画は、ご来場の皆様の投票を通してのご参加もいただいて、無事8年目を終えることが出来ました。建築主、デザイナーの皆様はじめ、ご協力いただいた方々にはあらためて心より御礼申し上げます。

今年は、52作品を出展させていただくことが出来ました。その中から以下の3作品を入選作品といたしましたので、設計者のコメント共あわせてご紹介いたします。

選ばれた方々には心よりお祝い申し上げますとともに、今後さらなるご活躍をお祈り申し上げます。

「きらりと光る北の建築」デザイン発掘隊



作品NO 15 「雁木のある家」



作品NO 40 「KWH」 kids with houses



作品NO 45 「株式会社 六書堂新社屋」

デザイン発掘隊による現地視察

作品NO 15 「雁木のある家」



設計者：照井 康徳氏（照井康徳建築設計事務所）

設計者のコメント

このたびは、「きらりと光る北の建築賞」を戴けて大変ありがたく思っております。

この建物が建つ敷地は自然林が住宅街にせまった雑木林でした。近所の方々のお散歩コースになっていたり、子供たちの探検の場所にもなっていた場所ですが、こころない人たちのゴミ捨て場にもなっていました。ここに建物を建てるにあたり、「建物が建ってしまっただけ残念だね」と思われぬように、「建物が建って良くなったね」と思われるような建築の佇まいを目指しました。そんな思いで設計をした建物でこの賞を戴けたことをとても嬉しく思います。小さな建物ですが、素敵なまちづくりに多少とも貢献できたのであれば幸いです。

今回の受賞を励みに、環境を敷地の物理的景観的環境でありその土地の気候風土環境であり感性に訴える空間環境の総体としてとらえ、洞察しながら、その環境のもつポテンシャルを活かした建築や生活スタイルの提案を日々の設計活動の中ですべてゆければと考えています。

最後になりましたが、お忙しい中この建築を発掘していただきましたデザイン発掘隊の方々、またご評価いただきました皆様に感謝を致します。

（てるい やすお）

作品NO 40 「 KWH 」 kids with houses



設計者：山之内 裕一氏（山之内建築研究所）

設計者のコメント

クライアントご夫妻の願いは、まだ幼いそして生まれたばかりの3人の子供たちと一緒に楽しく安心して暮らせる「子供たちと暮らす家」を手に入れることでした。



幼い子供たちは突然走り出すことがあるように、親はかたときも子供たちから目を離すことができません。

そのうえ親は家事を初めとする様々なたくさんのやるべき仕事をかかえています。しかしのびのび自由に子育てがしたい。そうした理由から、子供たちとアイコンタクトできるワンルームに近い平面構成や、L字型配置そして適度に囲われた中庭が提案されることとなりました。

「子供たちと暮らす家」は誰でもが暮らせる家でなければならないと考えました。子供たちはじめクライアントご夫婦や彼らのおじいちゃんとおばあちゃんにも楽しく居心地のよい家であるように願いました。また、近隣の住人にとっても歓迎される家でありたい。そうして提案された平屋に近くしかも北に傾斜する片流れ屋根が、冬の太陽と山の景観を近隣の住人へプレゼントしているのです。

「子供たちと暮らす家」は街という集落の中に馴染み、長年にわたり増改築された民家のようにありたいと思います。すこしの気取りやてらいもなく、元気にいきいき息づいている民家のようにありたいものです。その意味で、きらりと光る建築としてこの家进行评估していただいたことはたいへんな喜びです。今回発掘していただいた建築士事務所協会関係者のみなさまに感謝を申し上げます。

(やまのうち ゆういち)

作品NO 45 「株式会社 六書堂新社屋」



設計者：畠中 秀幸氏（スタジオ・シンフォニカ）

設計者のコメント

本建築は、各種展示を生業とする株六書堂の創業100周年を記念して計画されたもので、地域への文化的な還元をしたいという施主の意向を基にして、アートを介した社会とのつながりを主題に、ハードとソフト両面から設計を行ったものです。



大階段での音楽会の様子をまちに語りかけるガラスの箱と、収納用の白い箱を分離して置き、それらの上に細長い木の箱をのせた門型の構成をとりました。これにより駐車場を奥に設置することが可能になり、その代わりにまちに面する部分にたくさんの樹木を植えました。これら樹木は、時間の推移を影というかたちで建築に映しこみ、その成長を焼け具合の差によって木の外壁に緩やかに刻印していきます。木の箱の内部南側は絵画や書籍を収蔵したアートゾーン、北側が事務所ゾーンになっており、所員の方々はアートが複合された空間を感じつつデザインする環境となっています。

建築が永く存在し続けるためには「美しくあること」が必要なのはもちろんです。これに加えて、建築が一般の皆様にとって「いかにたくさんの出来事を生み出し続けているか」が重要であると感じています。それにより建築は、社会資産として経済的に循環し続け、人々やまちの記憶に残ることが可能になると思っています。その意味からも、審査に一般の方々の声が反映された本賞の受賞を非常に嬉しく感じております。建築士事務所協会様のご認識に敬意を表すると同時に、投票してくださった皆様、また審査員の皆様に深く感謝申し上げます。このたびは、ありがとうございました。

（畠中 秀幸）